

御国の福音

第6回：イザヤ書と御国の計画（前編）¹

目次

はじめに p. 2

I. エルサレムに流れ来る諸国民（2:1-4） p. 3

II. 王による被造世界の回復（11章） p. 6

III. 神の民となる諸国民（19章） p. 8

IV. イザヤの小黙示録（24-27章） p. 10

V. 世界大の裁きと王国の樹立（34-35章） p. 11

イザヤ書における御国の計画（前半分）のまとめ p. 12

はじめに

A. ダビデ契約の復習（前回、前々回分）

1. 「神の御国／王国」（the kingdom of God）の計画について学んでいる。御国の計画は、聖書を貫く軸である。
2. ダビデ契約の主な内容（サムエル記第二7章）
 - (1) ダビデの死後、神はダビデの子孫によって王国をお建てになる（7:12）。
 - (2) ダビデの子孫の「家」（王朝）と「王座」は永遠に続く（7:13）。
 - (3) 異邦人もまたこの契約の祝福に与る（7:19）。
 - (4) この契約はダビデ自身や後継者ソロモンに加え、「はるか先」の将来にも関係している（7:19）。

B. 預言書について

1. 預言者たちが語ったメッセージの要約（月例会「60分でわかる旧約聖書」より）²
 - (1) 神の主権と聖なるご性質
 - (2) 契約の民イスラエルの不従順の罪
 - (3) 悔い改めへの招き
 - (4) 迫り来る神の裁きと捕囚
 - (5) イスラエルの民を攻撃する周辺国への裁き
 - (6) 捕囚からのレムナント [残りの者] の帰還
 - (7) メシアの来臨とイスラエルの民によるメシアの拒否
 - (8) 大患難時代とイスラエルの民の回復
 - (9) 王としてのメシアの来臨
 - (10) メシア的王国の樹立
2. 預言者たちのメッセージでは、これまで学んできたことの成就が強調されている。
 - (1) アブラハム契約
 - (2) モーセ五書（特に申命記）で語られたイスラエルの将来に関する預言
 - (3) ダビデ契約

C. イザヤ書について

1. 著者は「アモツの子イザヤ」である (1:1)。
 - (1) 南王国ユダ、特にエルサレムで活動した預言者である。
 - (2) ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤと、4代の王の治世に渡って活動した。
 - (3) イザヤはアッシリア捕囚が起こる直前から活動を始め、約60年に渡って預言者として務めた。

2. イザヤ書の内容は、大きく前半と後半で分けることができる。
 - (1) 前半 (1-39章)
 - a) イスラエルと諸国民に対する裁きの警告
 - b) イスラエル・諸国民・被造世界全体の回復
 - (2) 後半 (40-66章)
 - a) 全体に渡って、イスラエル・諸国民・被造世界の回復が強調されている。
 - b) 軸となるのは「ヤハウエのしもべ」に関する預言である。
 - (3) 今回は前半の重要な箇所、今回は後半の重要な箇所を扱う。

I. エルサレムに流れ来る諸国民 (2:1-4)

A. イザヤ書 2:1-4 のポイント

1. イザヤ書 1章からの文脈
 - (1) イザヤ書 1章では、イスラエルの不信仰に対する叱責が語られた。しかし、その中でも希望はあった。
 - (2) 1:27「シオン [エルサレム] は公正によって贖われ、その町の立ち返る者は義によって贖われる。」
 - (3) 2:1-4では、1:27で予告されていた祝福の詳細が語られている。
 - a) 贖われたエルサレムの状態
 - b) エルサレムに立ち返る者の祝福

2. 2章の主題：「ユダとエルサレムについて見たことば」

3. 4つのポイント³
 - (1) シオンの山の卓越性

- (2) 異邦人のシオンの山への巡礼
- (3) 主が諸国民を裁かれる
- (4) 武器の除去

B. 解説

1. シオンの山の卓越性（2:2a）

- (1) これは「終わりの日」に関することである。
- (2) 「終わりの日」は直訳で「後の日」で、「この時の流れの終わりのころに」というニュアンスがある⁴。
- (3) 旧約聖書において「終わりの日」は、以下の内容のどれか、あるいはその全体を強調していることが多い。
 - a) 神の御怒りが注がれる日
 - b) メシア的王の到来
 - c) イスラエルの回復
- (4) 「**主**の家の家の山」すなわちエルサレムは、「山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ」。
 - a) エルサレムはイスラエルの中で最も標高が高い場所ではない。
 - b) 「終わりの日」には、エルサレムがイスラエルの中で最も高い場所になる。
 - c) ゼカリヤ書 14:4-8 は、主の地上的支配が実現する時、エルサレム周辺も含めてイスラエルに地形の激変が起きることを預言している。
- (5) エルサレムが実際に高く上げられることで、この町が靈的に非常に重要な町だということが物理的にも表されている。

2. 異邦人のシオンの山への巡礼（2:2b-3）

- (1) エルサレムへの巡礼のため、「すべての国々が流れて来る」（2節b）。
- (2) 諸国民がエルサレムを巡礼するのは、そこから「みおしえ」、「**主**のことば」が出るからである（3節）。

- (3) 諸国民は単なる義務や儀式としてではなく、自発的に神に従うため、エルサレムに上るようになる。
 - (4) この預言の重要性（1）リトマス試験紙としてのイスラエル
 - a) イスラエルは、神と人の関係を示す「リトマス試験紙」である。イスラエルに起こることは、彼らを通して祝福される異邦人にも起こる。
 - b) イスラエルは、神のみおしえ（モーセの律法）を得るために山（シナイ山）へ向かった。
 - c) イスラエルの神によって、異邦人が祝福される。
 - d) 異邦人もまた、神のみおしえを求めて山（シオンの山）へ向かうようになる。
 - (5) この預言の重要性（2）ダビデ契約の成就
 - a) ダビデ契約では、エルサレムから世界を統べ治めるメシア的王によって諸国民が祝福されること、また諸国民がその王に仕えることが預言されていた。
 - b) イザヤが預言した「終わりの日」に、このことが成就する。
3. 主が諸国民を裁かれる（2:4a）
- (1) この「終わりの日」には、神が「国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す」。
 - (2) 主の地上的統治が全世界に及ぶ。これは、主ご自身であり、人間的王でもあるイエス・キリストによって成就する（前回の学び参照）。
 - (3) 「終わりの日」には諸国家が存在しており、主が判決を下す必要がある問題が起こる。そして、主が実際に判決を下される。
下線部については、現在とも、永遠の秩序（黙 21-22 章）とも状態が異なる。
 - (4) イザヤ 2:1-4 の「終わりの日」の預言は、永遠の秩序の前の地上的王国（メシア的王国；千年王国）において成就する。
4. 武器の除去：剣は鋤に、槍は鎌に（2:4b）
- (1) この箇所第一義的意味は、現代における武力放棄の命令ではない。「終わりの日」に関する預言である。

- (2) メシア的王の統治下では世界的な平和が保証されており、人が武力を持つ必要がなくなる。
- (3) これは、3節で人々が自発的に主のみおしえを求めた結果でもある⁵。

II. 王による被造世界の回復（11章）

A. イザヤ書 11章のポイント

1. エッサイの子孫＝ダビデの子孫から統治者が出る（1-5節）。
2. ダビデの子の統治下では、動物界が回復される（6-9節）。
3. ダビデの子の統治下では、諸国民への祝福がある（10節）。
4. ダビデの子の統治下でイスラエルは回復される（11-16節）。

B. 解説

1. エッサイの根から若枝が出て実を結ぶ（1節）
 - (1) 2:1-4は、主がエルサレムを統べ治められる時の預言であり、ダビデ契約の成就が示唆されていた。ここでは、メシア的王が「エッサイの根株」から出ることが預言されている。
 - (2) エッサイはダビデの父である（ルツ 4:22）。
 - (3) この箇所から、イザヤによる御国の預言がダビデ契約の成就であることは明確である。
2. ダビデの子と聖霊（2節）
 - (1) 11:2a「その上に**主**の霊がとどまる。」
 - (2) 王の力の源は聖霊である。
 - (3) イエスの働きの力は、聖霊から与えられたものであった（ルカ 4:18；マタ 12:28）。

3. ダビデの子と神の義 (3-5 節)

- (1) メシア的王は御霊によって、正義と公正、真実をもって統べ治める。
- (2) この統治には懲罰的な側面がある。したがって、もはや何の問題もない永遠の秩序の前に、地上的王国が成就する必要がある。

4. 動物界の回復 (6-9 節)

- (1) ダビデの子の統治下では、動物界も祝福される。
 - (2) 神は動物界をも重要視しておられる。
 - a) 神は動物を形造られた (創 2:19)。
 - b) 神は人に、動物界を統治するよう命じられた (創 1:26-28)。
 - c) ノア契約は動物界との契約でもあった (創 9:9-12)。
 - (3) 回復の描写
 - a) 狼は子羊とともに宿る (6 節 a)。
 - b) 豹は子やぎとともに伏す (6 節 b)。
 - c) 子牛と若獅子が和らいで暮らす (6 節 c)。
 - d) 雌牛と熊、またその子たちも草を食む (7 節 a)。
 - e) 獅子も牛のように藁を食べる (7 節 b)。
 - f) 乳飲み子は毒蛇と戯れるが、傷つけられることはない (8 節)。
 - g) 御国において、動物たちが人に害を与えることはない (9 節)。
 - (4) 動物界の回復に関する 3 つの側面
 - a) 動物同士の調和
 - b) 動物と人の調和
 - c) 草食性の回復
- (5) 将来実現するメシアの地上的王国は、被造世界のあらゆる側面に回復をもたらす。

5. 諸国民への祝福（10節）

- (1) エッサイの根＝ダビデの子である王は諸国民の王となられる。
- (2) 諸国民もまた、その王に仕える。
- (3) こうして、イスラエルを通した諸国民の祝福（創 12:2-3）、ダビデの子孫を通した諸国民の祝福（Ⅱサム 7:19；詩 72:11）が成就する。

6. イスラエルの回復（11-16節）

- (1) 王による被造世界の回復の描写の最後で、イスラエルの回復が語られる。
- (2) イスラエルの回復の中で強調されているのは、世界的に離散したイスラエルが再び集められることである（12節）。
- (3) また、南北に分裂した民が再びひとつとなる（13節）。
- (4) イスラエルの最終的な帰還は、出エジプトにたとえられている（16節）。
- (5) これは申命記30:1-10等で語られていたイスラエルの帰還と回復の成就である。

Ⅲ. 神の民となる諸国民（19章）

A. イザヤ書 19章のポイント

1. イザヤ書 13-23章は、アッシリアの脅威が増大する時代に語られた、神による諸国への宣告である⁶。

バビロン（13:1-14:27）	バビロン（21:1-10）
ペリシテ（14:28-32）	エドム（21:11-12）
モアブ（15:1-16:14）	アラビア（21:13-17）
ダマスコ（17:1-18:7）	エルサレム（22:1-25）
エジプト（19:1-20:6）	ツロ（23:1-18）

2. 諸国民への宣告には、近い将来に成就した要素と、未だ成就していない要素がある。
3. ここでは、エジプトに対して語られている 19 章の内容に着目する。
4. 諸国民に対する神のご計画のパターン：裁きが下った後の祝福
 - (1) 神はその国（ここではエジプト）を裁かれる
 - (2) 神はその国に救いの御手を差し伸ばし、祝福される。
 - (3) その国はヤハウエの支配される地上的王国の一部となる。
 - (4) その国は、イスラエルと一緒に「神の民」となる。

B. 解説

1. エジプトへの裁き（1-15 節）
 - (1) 歴史的状況：アッシリアによる侵攻の脅威がエジプトにも迫っている。

 - (2) エジプトは助けを求めるが、神の裁きの前では無力である。

2. エジプトの希望
 - (1) 「その日」、エジプトはユダを恐れるようになる（16-17 節）。

 - (2) 「その日」、エジプトにはヘブル語を話す 5 つの町が起こる（18 節）⁷。

 - (3) 「その日」、エジプトは民族的にヤハウエに立ち返る（19-22 節）。
 - a) 「エジプトの地の真ん中」にヤハウエを礼拝するための祭壇が建てられる（19 節）。
 - b) エジプトは苦難の時、ヤハウエに叫ぶ（20 節）。
 - c) ヤハウエはエジプトのために戦い、彼らに救い主を送られる（20 節）。
 - d) ヤハウエが送られる救い主 = イスラエルの救い主でもあるお方は、諸国民にとっての救い主でもある。
 - e) エジプトはヤハウエに仕えるようになる（21 節）。

 - (4) 以上のことが実現する時、エジプトとアッシリアの間には平和が実現する。そして、両国はともにヤハウエに仕える（23 節）。

- (5) イスラエルはエジプト、アッシリアとともに祝福される（24節）。
- a) エジプト、アッシリア、イスラエルは敵対関係にあったが、「その日」にはともに神に仕えるようになる。
 - b) このことは歴史上未だ実現していない。
 - c) また、この時には、イスラエルはエジプトやアッシリアと並ぶ強い国となっている。イスラエルが「大いなる国民」になるというアブラハム契約の約束が成就する。
- (6) エジプト、アッシリアはイスラエルとともに神の民となる（25節）。
- a) 19:25「万軍の**主**は祝福して言われるわたしの民エジプト、わたしの手で造ったアッシリア、わたしのゆずりの民イスラエルに祝福があるように。」
 - b) 「わたしの民」や「わたしの手で造った [民]」は、通常イスラエルに対して使われる表現であるが、ここではエジプトとアッシリアに対しても使われている。
 - c) 彼らはイスラエルとともに神の民となる。
3. イザヤ書 19:23-25 の神学的重要性
- (1) 諸国民は御国の計画の一部である。
 - (2) 諸国民が神の民となるとは、イスラエルに組み込まれることではない。
 - a) 異邦人は異邦人のままで、イスラエルと一緒に神の民となる。
 - b) 「イスラエル」という言葉は、異邦人信者を含むものではない。

IV. イザヤの小黙示録（24-27章）

A. イザヤ書 24-27章のポイント

- 1. 13-23章で諸国民への宣告が与えられた後、世界に下る神の裁きについての警告と、その後で成就する御国の祝福が預言されている。
- 2. イザヤの小黙示録
 - (1) この3章は、聖書において最も詳細に語られている預言のひとつである。
 - (2) ヨハネの黙示録との類似性から、「イザヤの小黙示録」と呼ばれることがある⁸。この3章は、黙示録の内容の縮図となっている⁹。

3. この「小黙示録」はイザヤ書前半における御国の計画を考える上で非常に重要であるが、内容が膨大であるため、今回十分に扱うことはできない。
4. ポイントは、「世界大の裁きが下る患難の時代の後、神の御国が設立される」という点である。

B. 「小黙示録」のアウトライン¹⁰

1. 地上への裁き (24:1-25:12)
 - (1) 裁きの描写 (24:1-23)
 - (2) 裁きへの応答 (25:1-12)
2. 神の御国の設立 (26:1-27:13)

V. 世界大の裁きと王国の樹立 (34-35 章)

A. イザヤ書 34-35 章のポイント

1. 24-27 章と同様に、まず世界大の神の裁きが下り、それから神の御国が建てられることが教えられている。
2. 34-35 章の文脈
 - (1) 13 章以降のメインテーマは、イスラエルも含む世界中の国々に下る裁きの宣告である。
 - (2) 34-35 章は、13 章以降のセクションのクライマックスである。
3. 34 章：世界大の裁きが再び強調されている。
 - (1) 34:1-2

¹国々よ、近づいて聞け。
諸国の民よ、耳を傾けよ。
地とそこに満ちているものよ、聞け。
世界とそこから生え出たすべてのものよ。

²主²がすべての国に向かって激しく怒り、
そのすべての軍勢に向かって憤り、
彼らを聖絶し、虐殺されるにまかされたからだ。
4. 35 章：裁きの後に成就する御国での祝福が強調されている。
5. 19 章で確認した「世界大の裁きが下る患難の時代の後、神の御国が設立される」という流れは、イザヤ書の預言を読み解く鍵である。

イザヤ書における御国の計画（前半分）のまとめ

1. 預言書では、アブラハム契約、モーセ五書（特に申命記）で語られたイスラエルの将来に関する預言、そしてダビデ契約の成就に重点が置かれている。
2. メシアの統治下ではエルサレムが高く上げられ、諸国民も祝福される。また、メシアの統治下では世界的な平和が実現する（2:1-4）。
3. 王であるメシアはダビデの子として来られる。
4. メシアの統治下では、イスラエル、諸国民、動物界も含め、被造世界が理想的な状態に回復される（11章）。
5. メシアの統治下では、異邦人もまたイスラエルのように神の民となる（19章）。
6. まずイスラエルと諸国民の罪に対する世界大の裁きがあり、それからメシアによる地上的王国が建てられる（24-27；34-35章）。

¹ 本講義は以下のテキストに基づく。Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God* (Silverton, OR: Lampion Press, 2017), 145-78.

² 中川健一「60分でわかる旧約聖書（23）『イザヤ書』」ハーベスト大阪月例会、2017年1月17日<<https://subsplash.com/messagestation/top-page/mi/+pd3a98n>>；2018年9月8日閲覧。

³ John H. Sailhamer, "Evidence from Isaiah 2," in *The Coming Millennial Kingdom: A Case for Premillennial Interpretation*, eds. Donald K. Campbell and Jeffrey L. Townsend (Grand Rapids, MI: Kregel, 1997), 85.

⁴ 鍋谷堯爾『イザヤ書注解（上）1-23章』（いのちのことば社、2014年）158頁。

⁵ 前掲書、160頁。

⁶ 13-23章の構成は以下より引用した。Gary V. Smith, *Isaiah 1-39*, New American Commentary (Nashville, TN: B&H, 2007), 290.

⁷ 19:18の「カナン語」はヘブル語のことであると思われる（鍋谷、344頁）。本節後半では、5つの町のひとつは「イル・ハ・ヘレス」と呼ばれることが明らかにされている。新改訳2017の注ではこの町の名の意味が「破壊の町」とであるとされているが、エジプトへの希望が語られている文脈の中では奇妙な名前である（Smith, 361, n. 224）。多くの注解者は、中世のヘブル語写本や古代アラム語訳（タルゲーム）、死海写本などの読み方に従い、これは「太陽の町」という意味であろうと指摘している（Ibid.; Michael Rydelnik and James Spencer, "Isaiah," in *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham [Chicago: Moody, 2014], 1033; Robert B. Chisholm Jr., *Handbook on Prophets* [Grand Rapids, MI: Baker, 2002], 58, n. 99.）。

⁸ Arnold G. Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah: A Study of the Sequence of Prophetic Events*, rev. ed. (San Antonio, TX: Ariel Ministries, 2003), 179-81; Rydelnik and Spencer, 1036.

⁹ Vlach, 164.

¹⁰ Rydelnik and Spencer, 1009.